
勇敢な恋の歌

粗目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇敢な恋の歌

【コード】

N1629W

【作者名】

粗目

【あらすじ】

「Stand by me」番外編。できあがった二人の、なんのへんてつもないある朝の話。

寝返りを打った拍子に手が柔らかいものに当たって、薄く目を開いた。途端至近距離で目に入る野末の寝顔。眼鏡の痕が鼻にくつきりと赤痣になっていて痛そう。

そう思つて無意識に指で鼻の付け根のあたりを撫でた。眼鏡を掛けていない野末の顔が思いがけなく端正だと知ったのは、こうして同じベッドに眠る仲になってからだ。レンズだけを替えながら長年愛用しているという銀縁の眼鏡は全然野末に似合っていない。

「コンタクトにすればいいのに。……あ、でもコンタクトにしたら先生もてちやいそうだな。うんやっぱり眼鏡でいいや。眼鏡で顔の印象が悪くつたつて俺みたいに先生の魅力に気づいちゃう奴だつているしな」

「……朝から馬鹿な独り言だな、木下」

「あ。お…はようございます。先生」

朝の弱い野末が唸るように呟き、ぼんやりと目を開けて近すぎる距離にいる俺に少しぎよつとしたようだったが、朝の野末はいつもまして動きが鈍い。

おまけに昨夜の疲れがまだ残っているのだろう。居心地わるそうにみじろぎした体に腕を伸ばして改めて野末を腕の中に収めた。額に口づける。

本当は口にキスをしたいのだが、前に朝、起きぬけにキスをしたら物凄く嫌がられた。百年の恋も冷めるとまで言われた。百年の恋

どころか、その頃は押しして押しと付き合うことに承諾してもらって間もない頃だから、少しの不興を買うのも怖くて、すぐにベツドから飛び降りて土下座して謝ったものだった。

「今、何時だ」

「ええと、五時です。まだ早いよ」

「…早いな」

「まだ寝てると良いと思います」

「その前に、起こすな」

「すみません」

寝起きが悪い先生は朝は時間が許す限り眠っていたらしいから、不機嫌な声に逆らわずにすぐに謝る。俺は寝起きが良い方で、目が覚めたらすぐに頭も体も働かし、だからこうしてまだ本当の起床時間まで余裕のある時間に二人して目を覚ましたのなら、貴重な一時間を有効に使いたいのだが。未練がましく野末の髪をなでていたらうるさげに寝返りを打たれてしまった。

野末の背中、行儀よく背骨が並んでいるのが分かる痩せた背中。耐え切れずに指で背骨を一つ一つなぞると肩甲骨のあたりで野末が唸り声を上げた。

「だって先生の背中が」

「見るな触るな寝ないんならここから出て行け」

目が覚めていない野末の毒舌と愛想の無さはちょっと他に類を見ない。弱っている時などはそのまま心が折れるかと思うほどだ。今だって半分本気で「俺と睡眠どっちが大事ですか」と言いたくなる。言ったら最後、今日一日立ち直れなくなるなら言わないが。

先生ごめんなさい。とか甘えても生徒じゃないから可愛くない、などと言われるのがオチだから黙って背中を眺めてみる。生徒のこ

とだって可愛いなんて思っただけに、それ以下ってどれだけだ、なんて思いながら、肩甲骨の下あたりに昨夜俺がつけた痕を見つけた。多分腰の上あたりには噛み痕もあるはずだ。そんな記憶があるというか、背後から抱いてる時に、つい興奮しすぎて噛んでしまう。本当は首から肩のあたりが一番噛みやすいんだが、初めてやらかした朝に野末に……、初めの頃はよくベッドから飛び降りて土下座をしていたという話だ。別に懐かしくは無い。今だって時々はあることで、しかも困ったことにそれが嫌じゃない。野末が怒った顔をして睨みつけていても、高校生の頃に俺を絶望させた嫌悪や、俺をまるごと否定して無いものにしてしまうような頑なな拒絶がもう見られないから。

なんとなく、思い出したらどうしても見たくなって背骨の半ばあたりまで覆っている毛布をそろりと剥がした。起こさないように慎重に。噛み痕はやっぱりあって、少し古くて痣になってるのや多分昨夜つけたまだ赤いのがあって、俺の下半身がそわそわと落ち着きを失くし始める。野末は毛布を剥がれても眠りにしがみついていた。あと一時間でおきなくちゃいけないのに熟睡し始めるのは体にも悪い気がする。

せんせい。

そつと囁いて上半身を起こして野末を覗き込むと、顔に出来た影に反応してか野末は枕に顔を押し付けるように顔の角度を変えた。一層むらむらとこみあげてくるが、ここで何かしたら土下座どころではすまないことは分かっている、俺は振動に気をつけながらベッドから降りた。シャワーでも浴びて無理矢理すつきりするしかない。一人分広くなったベッドで野末がのびのびと体を伸ばした。

再会してすぐの頃は俺に怯えていて可愛かったのに、そののびのびした格好はなんなんだろう。

散々怯えさせた自覚はあって、野末を追い詰めることに暗い悦びさえ感じていた去年の自分も思い出してまた自己嫌悪に捕われながら、俺はシャワーに行こうと思っていたのも忘れて、ベッドを占領する野末に見惚れていた。強引にことをおしすすめてきたのは俺だが、野末が何を考えて俺と付き合ってくれているのかいまだに分らない。

分からないし、知りたくない。同情でも、いつかこっぴどく捨てる為でも、何かに利用する為でも、野末の傍に居られるのなら何でもいいとは思っているけれどわざわざ聞きたくない。

だから馬鹿な振りして（野末にはもともと馬鹿なんだと言われてしまっそうだが）、自己嫌悪だとか死にたいとかそんな暗い気持ちを押し潰して、野末を恋人にできた喜びだけを感じるようにして、毎日浮かれて過ごしている。当たり前恋人みたいな顔をして、当たり前前のことをするように野末を抱いている。そうしながら卑屈な犬みたいな気持ちで、野末の顔を窺ってしまう。もしも彼の眼に嫌悪があつたらどうしよう。

「ああー、駄目だな。暗い気持ちは駄目だ。先生、大好きですよ、愛してます」

元気を出す呪文みたいに乞うる気持ちを口にする。

と、野末の耳が赤くなった。顔は枕にうずもれていて分からないが、僅かに覗く頬も赤い、のか？

「先生？ 起きてるの」

「……そんなに凝視されて眠っていられる訳ないだろう」

「すみません」

野末の細い指がゆるゆると伸びて「水」と一言指図した。野末の為に何か出来るのが嬉しくて、いそいそとキッチンで水をコップに汲んで持つてくる。ベッドヘッドに背中を預けるように上半身を起こした野末の手にコップを握らせると彼は鳥がついばむように少しずつ水を飲んだ。コップを三分の一ほど空けて、そのまま俺に戻す。俺は残りを一気に飲み干してコップをベッドチェストの上に置いた。まだ宙に浮いたままの野末の手を、指を絡めるようにして握る。ほどかれなかったことにほっとして、手を握ったままベッドサイドに座った。

まだ少しぼんやりしている野末が何かを探しているようだから眼鏡を差し出すと首を振って断られた。

「あのな」

どうやら言葉を探していたらしい野末は暫くしてそう言い、また少し言葉を探して逡巡しながらゆっくりと言葉を続けた。

「確かに俺はお前が嫌いだったし気持ち悪かったし理解できなくて怖かった。強引さに流されてやけくそで付き合ってるように見えるかもしれない。ちゃんと言ってなかった俺も悪いが、いつまでも卑屈なお前も悪い」

「すみません」

「謝るな。あのな。俺は流されたかもしれないが自棄になってない。ちゃんと納得してるんだ」

「先生」

「なんだ」

「もう一声お願いします。あと一言お願いします。そこから始まる一言をください」

「すじょうゆ」

生真面目な顔をしてそう言い放った野末は、落胆してしょぼくれる俺の首に手をまわしてきた。なんだろう、と顔をあげる前にぐつとその手に力がかかり、いつのまにか野末の唇と俺の唇がちょこんと軽く触れていた。

もしかしたら初めてかもしれない、野末からのキスだ。

しかし感動に打ち震える間もなく、ごつんと額同士をぶつけられた。さほど強くぶつけられた訳ではないが鈍い痛みがじわりと広がる。けれど俺は顔がゆるんでくるのを止められなかった。

気持ち悪い奴だ、と野末が言うてすぐに手を離されたがそれも気にならないくらいだ。くつくつと笑いながら姿勢を保ってられずにベッドに上半身を倒し、さっきの野末と同じようにシーツに顔を押し付けて笑いをこらえた。

「ああ全く。もうさ……。あーあ、先生は勇敢だなあ。どうするの、あと四十五分しかないのにこんなに煽っちゃって」

「一人でなんとかしろ。私はもう少し寝る」

「酷いです」

「うるさい」

本気で眠るつもりなのか毛布ですっぽりと体をガードして横になった野末の腹の辺りでまだ笑いながら、頭の中で野末にRPGの勇者みたいな格好をさせていた。怯えながらも力を振り絞って立ち上がり、強大な敵に立ち向かう勇者だ。文弱の徒、という言葉が誰より似合う野末には似合わないにもほどがある格好だったが、でも魔法使いや僧侶でなくて勇者なんだよな、と俺は一人で納得した。

勇者は、「気持ちわるいからどっかいけ」と吐き捨てた。起床予

定まであと三十五分。強大な敵改め勇者の虜は、どうやって野末をその気にさせようかと考えている。虜になるのが下僕になるのが、性質が悪いのはそうそう変わらないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1629w/>

勇敢な恋の歌

2011年10月9日14時42分発行